

当神社には天御中主大神を主神とし、相殿には市杵嶋姫大神と蛭子大神をお祀りしております。

特に主神の天御中主大神は関西地方でお祀りしている神社が極稀で、江戸時代の国学者、本居宜長が「天の真中に坐々て世ノ中の宇斯たる神」また平田篤胤は「天地萬物の主宰神」と解され信仰されたご祭神です。

もとのご神域は現在の地より西南に約三町（八〇〇米）距る海岸にあり「蛭子の森」と呼ばれ、遠い神代の昔に蛭子大神がご鎮座の靈地を求められて淡路から本州に上陸された最初の地が和田岬で、蛭子大神が祀られた西撰最古の聖地です。かつて西宮神社の神輿が渡御されていたのもこのご縁によります。

時代はくんだり、承安三年（一一七三）平清盛が兵庫津（神戸港）を築港に着手した際に工事がことのほか難渋し、この事業の無事完成と将来の繁栄を祈願して、安芸の宮島より市杵嶋姫大神を勧請しました。

更にくんだり、万治元年（一六五八）天御中主大神の坐す御輿がこの地に流れ着き種々の神異をあらわし、これを知った時の領主青山大膳亮幸利は、神慮を慰むべく御社殿の大造営、やがてこの神を主神に、相殿には市杵嶋姫大神と蛭子大神をお祀り申し上げました。

これより後は南浜の総氏神として広く人々に親しまれ、その時にあった社務所は隣松院と呼ばれその庭園は天下の名林泉として称えられ江戸時代には西国諸大名が参勤交代の折に長途の旅情を慰め、更に幕末においては勝海舟、十四代將軍家茂、十五代將軍慶喜、また勤皇の志士の多くが参拝し、この書院で休息し、あるいは密議をこらすなど、明治維新の一舞台となったところでした。

しかしながら風光明媚をうたわれたこの地も国策による近代化の波が押し寄せ、この地に造船所の建設が計画され、やむなく現在の御社地に御移転したのは明治三十五年のことでした。

現在では交通安全をはじめとする各種のご祈禱を祈願する神社として知られています。